

## ディナ・アル・カーシム 「見捨てられた言葉」 著者紹介 鶴飼哲

ディナ・アル・カーシム氏は現在カリフォルニア大学アーヴァイン校で教鞭を取る気鋭の文学研究者である。アラブ語圏、英語圏、フランス語圏の文学に通暁するとともに、カリフォルニア大学バークレー校で文学および社会運動研究の理論的研鑽を積み、ジュディス・バトラーの指導のもとで博士号を取得したのち、論文「終わりある抵抗、終わりなき抵抗」(『*Journal of American Studies*, Termination and Interminable' in *Derrida, Deleuze, Psychoanalysis*, Columbia University Press, 2007) などで新たな批評的知性として注目を集めている。同論文では、南アフリカ共和国で反アパルトヘイト運動のマスターナラティブに統合不可能なスラム地区の住民運動の一面面を取り上げ、女性たちが家の防衛のために共同体の掟を余儀なく侵犯したとき、その抵抗の文書化が逢着した困難を詳細に分析した。

いまなお解決の見通しのつかない歴史的苦難のうちにあるパレスチナ民族に出自を持つアル・カーシム氏には、故エドワード・サイードの仕事を継承し発展する役割が期待されている。アル・カーシム氏は現在、被抑圧民族としてのみずからの経験を直接語る代わりに、他の諸民族の解放運動の渦中に生み落とされた、しばしば周縁的な、多様な表現に着目しつつ、ある普遍的な批評の地平を開こうとしているように見える。本論文は二〇〇九年五月二十九日に一橋大学で行われた講演を原型としているが、同時に、近刊予定の初の単著 *On Pain of Speech: Fantasies of the First Order and the Literary Kant* (University of California Press, Flashpoints Series, 2010 January) のエッセンスに相当するもののようにも思われる。アル・カーシム氏は一橋大学における講演ののちの討論が建設的なものであったことを大変喜ばれていたが、この翻訳紹介とともに、いっそう豊かな学問的対話が深まっていくことを期待したい。(二〇一〇年一月四日)

## 『見捨てられた言葉』

著・ディナ・アルルカーシム／訳・尾崎文太

われわれは以下のことに取り組んでいる、すなわち判読可能性という伝統的価値を覆す言説に。それは下方からの解釈であり、決して単純で基本的で明晰なものではなく、むしろ混乱して不透明で無秩序で偶然の産物なのである。

ミシェル・フーコー、『社会は防衛しなければならない』

正に「私」が、私自身が語りかける者との関係性によって疑問視されるのだ。この〈他者〉との関係性は確実に私の物語を損なったり私の発話を無に帰すものではないが、それは常に取り消しの兆候を以て私の発話を混乱させる。

ジュディス・バトラー、『ジェンダーをほどく』

一九八三年の秋、翌年の夏の死のわずか数ヶ月前、ミシェル・フーコーは講義を行い、それは後に『臆せず語る』という題名で発表されることになるのだが、その講義において「西洋哲学における批判的態度の系譜学を構築すること」が提案された<sup>1</sup>。いみじくもこの講演は、カリフォルニア大学バークレー校のキャンパスで行われた。そこは二十年前に学生主導の言論

の自由の運動が政治的講演の禁止を撤廃すべく闘争して成功を収め、アカデミズムの自由を守った地であった。言論の自由と古代ギリシャにおける自由な語り手を紹介したこの講演については、一九六〇年代からの集団闘争の抵抗を通して獲得された進歩的自由によって触発されたと考える者もいるだろう。さらにはフーコーの講演は、一九七〇年代後半の彼の著作同様、聴

衆に、勇氣ある「権力への真実の発話」とは、すでに正にその行為の時点で制度化された力の形態となり、全ての者にアクセスが許されるわけではない政治的権威となっているかもしれないと考えることを要求することによって、ある前提を覆すことになる。一九七〇年代の講義の話題から取り上げられた大胆な提案の中で、フーコーは、自由の実践とは実際には明確で主権的な明晰性から生じるものではないだろうと論じている。批判的態度とはその実存を理性的明晰性ではなく不透明な深みや理性の法と秩序に束縛されない発話に負っているのだという提案は、彼の晩年の研究の他のテーマとも共鳴する<sup>22</sup>。すなわちフーコーは、その死を前にして、また彼の研究の目的の中心が神秘的な根拠ではなく権力とその認識論の分析にあるのだというよくある誤解に抗して、自らの研究の終着点について一九六〇年代と区別し次のように語っている。「私の目標は（……）人間をわれわれの文化の中で主体にしたてあげた多様な方法論の歴史を作り出すことだった<sup>23</sup>。」抵抗とは、近代的な生政治の権力体制下での主体生成の鍵であるが、それは常にそれとともにある存在であり親しい存在である権力との緊密な関係の中で増殖してゆく。抵抗の重要性に関してフーコーは、極めて的確に、隷属化と主体性と服従への闘争とは何かを説明する<sup>24</sup>。しかしながら支配への大衆的および個人的抵抗の意味を強調しな

がら、フーコーは抵抗的表現の伝統に対する批判を放棄しなかった。彼が繰り返し論じてきたことだが、抵抗的表現とは実際のところ、権力と結びつき権力の代理となるものなのだ。

権力に真実の発話を可能たらしめる主体的発話の人間主義的前提に対してわれわれがこれから展開する議論の関心は、フーコーが論じてきた、権力に内在しながら認可済みの判読可能性の周縁で偶然的で不透明な発話の形態をとる闘争の概念にある。ジュディス・バトラはフーコーの問題系を語りかけの問題で再形式化し、「自らのほどの微によって混乱した」発話行為の間主体性を論じた。相手へと語りかけられながら自らの特別な発話の中に埋没しているこの叫びは、われわれの反抗や抵抗の思考を悩ます自律性の概念を複雑化する。さらには語る主体すなわち私の発話における「私」とは、それ自身半分フィクションの存在であり、その発話は語りかけの相手である他者に依存しているという考えが、私の判読可能性を定義する主権的話者であるもう一人のフィクションの存在の前で浮かんでくる。自己の技術と隷属化がわれわれにそのほどの手段を提供してくれるかもしれない方法の研究に没頭していた晩年のフーコーは、ボルノ小説と罵りのテクニクに執着した主体性と主権の哲学者であったジョルジュ・パタイユから引き継いだ言説の概念を通じてなされる近代的な隷属化の理解の中での話者と語りか

けられる者の複雑な相互依存の問題へと正確に惹き付けられていた。フーコーは、抵抗は権力に内在するものであり、過剰さや判断不能性が規範とその外形や権威の存在を露呈させるのだと考えたのだが、彼のこのような考えは直接的に、正に自己理解のための能力の先端へと突き進んだこの反体制的哲学者の著作に由来している。私は「罵りrant」という言葉を、偶然的で不透明な発話を特徴づける語りかけと嘆願と攻撃の総体を表すものであると提案したい。そのような発話は、時に自らをカウンターディスコースの中に集積させ、モダニズムの著作の兆候となるものだが、真実の語りと認められながらも自らのほどの混乱からその発話を保証することができない。

私はこの悲痛な訴えの近代的兆候を「罵り」と呼ぶことにする。それは、イギリスの一六五〇年の冒瀆法に対する抵抗としての宗教的異議申し立てである十七世紀の淫らな自由思想と大衆の無律法主義と喧噪派ノイズ派とに共鳴する。その敵によって精神的倫理的自律性と酒場や売春宿や路上での性的肉体的自由の教条を説く呪わしい騒音として定義された二十世紀の喧噪派は、近代における公的な異議申し立てと言論の自由と暴力的権力の起源をたどろうとするマルクス主義の歴史家の興味をかき立てる。個別の罵る者はその激情的な罵りをほとんど残さない。彼らは彼らが引き起こした中傷を通じてよく知られる。近代的デカダ

ンスと前衛的道化の先駆者としての罵る者は、躁的な異議申し立てとそれ自体統一の普遍的社会プログラムに還元され得ない神や王や国家に対する扇情的語りかけの象徴である。歴史的な喧噪派はその力を使い果たし王の正義に苦しめられるが、主権者や国家や教会の法をその敵と捉える公的な発話についての民衆の記憶の中に痕跡を残している。「罵り」という言葉についての近代初期におけるもう一つの関連は、若者の粗野なお祭り騒ぎやばか騒ぎにある。イギリスにおける一連の市民戦争は、罵る者という完全なスキャンダルについての想像力に対する神秘的空間を開いた。罵る者のこれ見よがしの主権や性的自由は、拷問と国家の検閲の下での個別の罵りのあっけない挫折を正しく伝えることはないが、われわれが英雄なのか恐怖なのか決めかねるようなこの伝説的存在は、近代性に取り憑いている自己発明の前触れなのだ。そして、ジャネット・ライオンのマニフェストに関する素晴らしい著作の中で初期の反体制派について言及されているように、水平派、喧噪派、耕作派への学問的参照は少なくともにも関わず、罵る者たちはその明らかな痕跡をほとんど残していないので、その存在すら十七世紀の専門家たちによって疑問視されてきた。罵る者たちは周辺の存在よりさらに低い位置におり、その声が聞かれることはなく、いかなる正統的遺産も生み出すことはなかった。

歴史的関心を呼ぶこれらの失敗は、下方からの声に関するジャンル研究に正当性を与えるマニフェストのような容易に伝達可能な形式に根ざす抵抗的発話の伝統に場を譲ってきた。罵りという「様式」はそのような遺産の余地を全く持たず、その形式におけるいかなる継承者も残さなかった。むしろ罵りは、ジャンルに正当性を認める形式の規則的アイデンティティを持たず、兆候として反復されるものであった。フーコーのカウンターディスコースの概念は、クリストファー・ヒルの喧噪派に関するマルクス主義歴史学のスケッチとは異なる。というのもカウンターディスコースは、われわれをベンヤミンの勝者と被征服者の弁証法に導くこともなければ、われわれに階級意識についての文字通りの想像力を強制することもないからだ。下方からの不透明な発話はプログラムを組織したり自らをひとつの意識として表明したりすることができない。その無秩序で偶然的な発話は、要求のための既存の存在としてのより広範な社会的判読可能性さえもその目標とはしない。そしてカウンターのディスコースのそのような特徴は、自らに被征服者の経験を請け負おうとするマルクス主義的アプローチと競い合うことを余儀なくさせる。テオドル・アドルノを参照として持ち出す時、われわれは、勝者と被征服者の弁証法ばかりでなく同化不能な要素によっても特徴づけられる世界を批判的に思考する在り方

を示すために、ミニマ・モラリアの第九十九項を繙くかもしれない。アドルノはわれわれに次のように言う。「書物は、この力学によって受け入れられなかった存在、挫折した存在、すなわち弁証法から逃れてきた廃棄物や盲点と呼ばれるものたちに對しても語りかけるべきだ。」なぜなら「打ち負かされたものの性質においてこそ、不能な状態でのその不適切さや異様さや無価値が露呈するからである（……）。理論は不規則で不透明で同化不能なものを扱わなければならない。」<sup>6</sup> 廃棄物は支配的秩序と不協和音を奏でるが、それは価値のヒエラルキーがその品位を軽視しているからだけではない。異様なものや無価値なものとは歴史の暗号であり、新たな価値の前兆となり未だかつて判読不能であった声を語るものである。勝者もかつての被支配者も不協和音や不調和声を通じてわれわれに語りかけることはない。歴史が同化することのできなかつた存在の問題とともにフーコーは、新たな生の実践のための可能性の分野としての影や廃棄されたものたちに関心を向けることによって、権力の弁証法的構図と法によるその表象の問題からシフトしてゆくことになる。

## 見捨てられた言葉

一九五一年、「パスポート違反」のためにエリス島で無期限の逮捕をされた、トリニダドの社会主義者で先駆的なポストコロナルの理論家であるC・L・R・ジェームズは、一八五〇年に書かれた小説が一九五〇年代の社会の唯一で最も精緻な考察であることを証明する仕事に取りかかった。『公益を害する』行為や『国家の安全を覆す』行為に<sup>②</sup>関与したという理由で逮捕された作家が、文芸批判の中に、明らかな弁明や公的な語りかけを見いだすことは稀にちがいない。しかしながらジェームズは、『船員たち、背教者たち、流人たち…ハーマン・メルヴィルの作品とわれわれが住む世界』の論議を呼ぶ後書き「自然だが必然的な結論」を、この本を書くことで明らかにした。「偉大な文学と社会生活が不可分のものである。」<sup>③</sup>という主張によって始めた。この文学と社会生活の結合が異様な輝きを放つのは、ジェームズが、「残りの社会から隔絶され、アメリカの行政官と役人、公安の役人が、おそらく千人もの船員、『孤立者』、背教者そして世界のあらゆる場所から流刑に処せられた人々の運命を支配しているような孤島に投げ込まれた状況で、ものを書くこととしていた。」<sup>④</sup>時であった。この「完全不幸の空間」<sup>⑤</sup>からこそ、ジェームズは、彼の無期限の拘留の言

葉を抵抗と批判の言語に直し、分析的読みの作業が変革を可能にする力を持っており持ちうることを示そうとしたのだ。

私は、もし私が一言も言葉を発することなくこれらすべての進行を許容したら、あるいは、私が話す前に私の案件が決定されるのを待っていたとしたら、決してこの恥と恥辱から立ち直ることはできないだろうという結論に達した。いつか、誰かが話さなければならなかった。それはどこかの博愛主義者ではなく、実際に巻き込まれた人間だ。私がメルヴィルに関する本と一緒にこの抗議文を発表したのは、私が示したように、書かれたものとしてのこの本が私の経験の一部だからだ。それはまた、アメリカ人に対する主張でもある。それは、私が一市民でありたいという欲求は利己的でも軽薄なものでもないという、私が打ち出さうる最高の主張である<sup>⑥</sup>。

ジェームズはいかに怒っているようにとも、拘留の詳細を語るときに権力に対する真実を語ってはいない。実際、彼の語りかけの形式やその政治的な力は、抗議や論争や表現の自由や公共圏に関する伝統的理論への挑戦を示している。彼が語りかける読者は、国家や彼を苛んだつまらない役人や囚人仲間に限定されてはいない。もし彼が権力に対してものを言っているのだとした

ら、その権力とは、ピークオッド号の乗組員と同じくらい多様で、彼の言うことなど聞かないであろう読者を通じて拡散された権力だ。アメリカ人の前に示されたものの、出版できるかわからない運命の中に漂流しているひとつの主張、そこでのジェームズの抗議は、目的として、いくつもの方向性を同時に持っている。それは告発に対する弁明であり、欲求の表明であり、事実の正しい記録であり、権力の濫用への批判であり、彼が当時アメリカ的とレッテル貼った個々の価値観を維持しよう読者に訴えることでもある<sup>12</sup>。もしそれが目的において万華鏡のごとき語りかけであったとしても、それは、示された要求が語りかけの権力を主張しているように、この後書きの多くの目的と多様な目標を、断片化した空間の中に集積させる。批判の書物が「私の経験の一部」であるために抗議となりうるのであれば、『船員たち』はこの特殊性を持ちながら、そこから批判によって、そして批判を通じてのみ示される自由の普遍的投影の地平を作り出している。しかし書くことによって再び獲得された普遍性は、単なる行動の革命的奨励よりは、語りかけの政治学と解釈の作業に結びついている。

国家がジェームズの有罪を認めた語りかけの歪みについてドナルド・ピースが分析しているが、この分析では、『船員たち』とその後書きの核心部分における語りのポジションの複雑さが

端的に示されている。権力の剥き出しの行為である無期限拘留の判決は、第一に、市民が要請しうる法の適用外の新しい範疇へと被疑者を分類し直すことに基づいていた。分類のし直しとは、口封じの道具として、国家の安全に脅威をもたらすものとして入国を拒絶される新しい移民に対して有効であるのと同じように、ジェームズのように一九三〇年に帰化手続きを始めていたような人間にも有効であった。ピースは、国家が「ジェームズを法に抵触する外国人と分類した」と、彼をエリス島に移送したことは、ジェームズから彼自身の名前で話す権利を奪った。彼が外国人の破壊分子であるという国家の見解は、彼が議会の委員会の前で証言をする可能性を無効にした (MRC, 152) と指摘する。市民としての表現と適性手続きの権利から根本的に排除され、その本によってアメリカの民主主義を破壊していると糾弾されたジェームズは、「こうした公的抗議を強要される (MRC, 156)」。そこでは彼は、「司法が、市民あるいは市民となりうる者の意見を言う権利を認めた」場合でも、「法の名の下に続いている重大な不正義」を表明するためには、外国人というレッテルを積極的に引き受けなければならぬ。しかし、証言の権利を奪われ、法に訴える可能性のない沈黙の中に再分類されたことは、最初のステップに過ぎなかったと、ピースは主張する。

国家がジェームズは安全への脅威であると宣言した後で、ジェームズの法的主体は「あなた」へと格下げになった。二人称で語りかけられることにより、ジェームズは法権力執行の対象となったが、もはや法規範の主体としてはみなされなかった。ジェームズの「私」として話す権利の喪失は、彼が法廷で自分の主張を表明することを可能とする証言の言葉を否定し、彼の市民社会の内部での抗告の権利を失効させるものであった。国家が彼の人称に関する同一性を法を遵守すべき「あなた」に限定したことは、同時に、彼が国家の主権的意思を示すと理解される「われわれ人民」としての「われわれ」の一員でいられなくなったことを意味している。「あなた」は決して「われわれ」にはならない。なぜなら、破壊分子と名付けられた「あなた」に対して、国家は、「私」として対話する権利を否定したからだ (MRC, xxvii)。

再分類された「あなた」は、外国人を指定する権力環境とそれのもたらす効果の両方として沈黙を強要する。対話行為と違って、「あなた」と「われわれ」が分離した状態では、行為を正当化する承認を外国人から必要とはしない。同様に、「あなた」を予め実効性を持って排除することによって、「われわれ人民」

という範疇を安定させることもない。むしろ「われわれ」から「あなた」への再分類の行為によって確立した法的主体は、「われわれ人民」の範囲内での市民の声の可能性を脱臼させ、それをその境界内部の内容物ではなく語りかけの権力によって定義される絶対主権の声に代える。ピースの主張によれば、「あなた」は「われわれ」になれないばかりでなく、「われわれ」は直接的な語りかけという脅威の下で代弁され生きているのであり、その状況を通じて、国家による分類のし直しは、マッカーシーの尋問で見られたことだが、国家の社会的規範によって前もって保証されている権利ではなく、国家の社会的規範そのものによって認定される話者の有価値性の審査となるのだ。ジェームズによると、マッカーシー法は法自体の無法制を可能にした。それはアメリカ民主主義の司法的規範と文化的原則を侵害し、事実上外国人としての思想と表現の自由をもたらしした。

抗議は『船員たち』において投げかけられた大きな議論の本質的な一部を成しているというジェームズの主張にもかかわらず、この後書きは、その後一九七八年と一九八五年に一九五三年の二千部しか出版されなかった初版が再版された時には、部分的あるいは全体的に削除されることになる。文学批判と歴史批判による「特別な嘆願」として退けられたこの後書きは、アメリカ市民への悲痛な訴えであったが、少なくとも誹謗者の目

には、真面目な考察から成り立っているこの作品の質を下げるものとして映った<sup>⑧</sup>。しかし、この特別嘆願の性質こそがまさに、共感への悲痛な要請を転覆罪の積極的な要請に転じるのだ。ジェームズの後書きにおける語りかけの戦略は、その読者のほとんどが聞き損ねた政治的介入を成立させている。結局のところ、国家の敵と見なされる外国人としての立場を引き受けることによってのみ、ジェームズは一人称を獲得でき、語りかけの政治学によって規定され無期限拘留という時間の空間化の中で表現された司法的な排除の言葉に挑戦できるのだ。彼を告発する者とまさに同じ地平で出会いながら、ジェームズは疎外の操作を反転させ、主権国家の権威において看守がしたように法を無法性に変えるのではなく、外部に在る外国人をアメリカ的価値の信頼における証言者に変貌させる。周縁が内部の驥となり、野蠻人を受け付けなかった境界が、親密で生来の内部、空虚なゆえに過剰である主権によって倒錯した反転から救われた法の真実の表現となる。

しかしながら、ジェームズがアメリカ人民に、アメリカ市民になりたいという自らの誠実な欲求を知ってほしいと要求する時、法による法の転覆は彼を、より高いレトリックの次元へと持ち上げるだけである。特別嘆願のレトリックの過剰の中で、そのような訴えは疎外の反転をもたらしもするのだが、そのよ

うな過剰は後書きのための著者のアリバイとなる釈明や真の証言の伝統的形式を変形させる。辛辣であったり穏便であったりしながら、ジェームズの国家やエリス島の囚人仲間に対する罵りは、刑務所のシステムを非難し、国家の法の代表者、判事や連邦議会議員や警察署長らに等しく呼びかけた。彼の特別な状況と特定の看守や囚人の状況への注意を喚起しながら、この罵りのテクストは、普遍的なテーマの水準を下げているというよりも、特殊で特別な主題の必然的な擁護を強調している。法に語りかけながら、法自体が課す条件の下で、この乱暴な後書きは、自らの名前において話すことの幻想に陥わってくる。ここでは話す権利は認められてはおらず、特別嘆願としての例外的な要求だけが無許可の発話を可能にするのだ。

ジェームズの編集者と批評家が過度に特殊で自己中心的だとして後書きから削除したものは、分析的中立性の手法と理性的議論の伝統と先行する七つの章の冷静な叙述に衝撃を与える。しかしながら、その不快で乱暴な性質にもかかわらず、思考の確実な一貫性は、最終章を全体へと結びつける。彼の本の議論の裏付けとして、彼自身の経験を前景化させるジェームズ的主張。拷問の一形式としての医療行為差し止めと、身体の細部の公表への注目。ヒステリーに近い上り調子の口調で語られる、裁判の悪夢のやむことのない語り。この「語る身体のスキャン



ペンヤミンが、その試論「ポードレルのいくつかのモティーフについて<sup>16)</sup>」の冒頭で、その詩人は、彼を読むことができないう読者のため、すなわちその注意力が、ポードレルがそれによって書き、彼の詩の最も豊かな源であった条件によって打ち砕かれた読者のために書いたのだとわれわれに語る時、ペンヤミンは、ジャン・ジュネが、ジョージ・ジャクソンの『ソウルダッド・ブラザー』を紹介した刑務所のナラティブの雄弁な証言の中で指摘している、不適切であり使用中止された空間としての親密な周縁から常に話しかける語りかけの新しい在り方の想像力へのヒントを示しているのだ。

刑務所で書かれた本、あるいはなんらかの監禁状態の中で書かれた本は、何より、追放されたことのない読者に向けて、すなわち刑務所に入った経験もこれから入る予定もない読者に向けて語られる。だからそのような本はある意味遠回りな手順を踏むのだ。さもなければ、その作者は、禁じられ呪われた言葉を、血なまぐさい言葉を、興奮状態で吐き出された言葉を、精子とともに吐き出され、中傷され、見捨てられた言葉を、神の究極名のように書かれなかった言葉を、危険で錠をかけられた言葉を、辞書に載っていない言葉を、というのもそれらが辞書に載っていたとしたら、完全で欠けたこと

ろがないものとしてその語は、認められず、剝奪された性と自由によってのみ刺激される行きの詰まるような悲惨をあまりに早く語ってしまうであろうから、辞書には載っていないのだが、そのような言葉たちを取り上げ、紙の上に叩き付けなければならぬのだ。

それゆえ、地獄からわれわれに届く書物が、毀損され、酩酊した過度に騒々しい装飾品であるかのようにわれわれに届くことは、理のあることである。

このように獄中で、読者によってのみ認められる者の状況を前にして、その読者は、率直な言葉が決して再構築されることのない状況の恥辱を推測するのだ。しかしながら読者は、許可された言葉を前にして、他者の声を聞くことを知ることになる<sup>17)</sup>。

ジェームズもジュネも、獄中から、追放されたものとしての夜を過ごすことなどない読者へと訴えることの危険性を知っている。そのような訴えは、判決によって徴付けられ、「真っ直ぐな言葉」という通常の流れから隔離されている。遠回しな語りかけは、言語のより広く暴力的な真実の削除を要求する。「普通の」読者の耳は、獄中からの慎重な書き物の背後にある書か



れなかつた言葉、見捨てられた言葉に耳を傾ける必要がある。

そのような聴取は、公共圏に入ろうとする努力と獄中からの言論の自由の実践を損なうバラバラな空白と検閲を読むことの訓練を要求する。ジェームズは、弁明しながら、彼の抗議を出版する必要を正当化する。実際、ジェームズにとって、別の人間になりたいという誠実な欲求、あるいは彼の拘留とそれを正当化した法の言葉で言えば市民になりたいという欲求を「誰かが語る必要があつた」のだ。話すことを余儀なくされ、しかし彼の公共の読者に語りかけることを許されない状況で、投獄された作者の表現は、すでにいかなる検閲もなされる必要がないという禁制の下に生まれている。書くための空間は、すでに排除された登録登録された空間の空間であり、自由な表現の公共空間に現れる言葉は、禁止よりも根深い先行する暴力を堪えてきたのだ。それらの言葉は、今や絶対的な差異である「あなた」へと運命付けられている。注意深い聴取が、幽霊のごとき不在がページ上に痕跡を残した見捨てられた言葉を直感してくれることを望みながら、追放された者の本は、内部者の耳へと向けられているのだ。ジェームズの後書きは、『船員たち』を読んで知識は得たが、まだジェームズの解説によって詳細に説明された主体性を引き受ける準備のできていない読者たちにむけて語られる。変わることを望み、引き受けることの準備ができていない中で、

作家と読者の位置づけは、語りかけのありきたりな弁証法的枠組みを拒絶し、語りかけを法無き主権に対する法による自由を規定する、生成し、参与し、誘惑し、肯定する政治空間へと結びつける。そのために、ジェームズの親密な空間の時間的周縁性は、彼の声を聞くことはできない人々へ送られたメッセージとしての、そして同時に彼を縛り続ける法としての語りかけの様式を構造化する。

マニフェストの自律的発話でもなく、呪いの言葉でもなく、見捨てられた言葉、この抗議は、作家がそこに束縛されると同時に強制される主権を持たない発話なのだ。ジェームズはみごとに、ジュネの遠回しの語りかけのジレンマを理解する。それは正確さとジャンルの規制を通じてその怒りを調節しなければならぬ。このようにしてその後書きを形作りながら、ジェームズは、現代性の複雑な相貌、すなわち近代国家の規範的メカニズムにおける同時的な不在と主権の普及の相貌を呼び覚ます。それは、自らが作用するために、話すことと書くこと、質疑と再分類、隷属化と主体化の錯綜した結びつきに依拠している。国家の規律に応える時、ジェームズの罵りは、ポストコロニアル理論の古典的トポスとしての「キャリバン」の抗議と非難の典型をはるかに凌駕する。というのも、彼は、吐き捨てられた書かれていない言葉に屈服するのではなく、怒りを多様で屈折



した語りかけの公式の構造へと結びつけるからだ<sup>18</sup>。ある意味では失敗したマニフェストであるジェームズのテキストは、読者との根本的な同一化よりはむしろ、彼の黒人としての、被植民者としての、移民としての、作家としての、病人としての、社会主義者としての差異を前景化する。この戦略は、訴えを組織し、そのことによって英雄的で主権的な語りの想像的構造に反論し、棄却<sup>アブジェクション</sup>された語りを別の聴取の素地にするために、棄却<sup>アブジェクション</sup>をおぞま<sup>アブゾマ</sup>さを想定する。このような理由で、私は、ジェームズの抗議を、罵りというモダニズムの文学的徴候の典型とみなすのだ。ジャンルでもなく心理状態の信頼できる指標でもなく、罵りは、モダニズムのテキストに侵入した抗議の語りかけの行為なのだ。自分自身の声で話し、法を非難することができるといふ空想に頼りながら、罵りは無意識のうちに、それが批判しようとしている法を構築する。この矛盾した語りかけは、主権の語りの空想に関わりつつ、それが抵抗している象徴的秩序を作り出す。なぜなら罵りは、それを命ずる法を告発するのなら、自身の棄却を証明しなければならないからだ。罵る者はつねに戦争状態にある。しかし罵り自体は、解放された瞬間開いてすぐ静まる息をのむような一瞬の怒りであり、それがそうなりたいた望む主権の主体の獲得も不安定なものである。怪物的なティロスや卑劣な敵や悲痛な不平者は、自らの声を投影す

る。一方罵る者は、認めることはできても保持することはできない幽霊のような主権と格闘するのだ。

戦争状態の作家のイメージは、変革のためのマニフェストを発し、左右の判断を下す挑戦的なアヴァンギャルドとのわれわれの近代的なロマンスを思い起こさせる。ジェームズとジュネは、戦争状態の異なった想像力を提供する。そのとき彼らは、訴えの立場を作り出すような配慮をし、その特殊な抗議が彼らを周縁へと追いやり、彼らに正義と自己表明ばかりでなく孤独をも与えることを痛切に意識している。われわれは、彼らの語りかけと彼らの自己様式化の困難を、「遠回りの語りかけ」と呼び続けるだろう。しかし空間的な隠喩は、賭けられたものの全体を捉えることはできない。それは、媒介が規則だとしても、作り込まれた怒りは実体を持つからだ。「生の可能性を表す話は、必ずしも要請にはならない。それは、作者がそれなしではその過剰な可能性に盲目であったかもしれない怒りの契機を呼び起こす<sup>19</sup>。」バタイユは、パリのシュールレアリストやその他のアヴァンギャルド芸術家のスペイン革命へのまったく無益な貢献について書かれた自伝への前書きとして、こう書いている。過剰な試練から派生した怒りは、いかなる作家をも、読まれるに値する存在に変える。この正当化の経験なくして「われわれはどうやってその本を読み続けることができようか。作者



がそこに束縛されることがなかったのだとしたら。」バタイユは、散漫な言語の迂回を通じてのみ表現を見つめるような非主権的な洞察力の試練における書くことの能力を同定する。結局

彼は、彼を自己と読者に分裂させるような媒介のヴェールに抗うようになるが、弁証法を、それを保留することによって乗り越え、書くことを語りかけの基本的関係性へと変えるような論争を宣言する本質的な部分は、彼にとって変わらぬ関心の対象であり続けた<sup>20</sup>。罵りの下にある社会的対立は、書くことによる相手へのアブローチの中に現れ、対立の秩序だった弁証法ではなく、所与の隷属化の言葉への攻撃において判読不能性を作動させる罵りの戦術的能力の中に実体化する。バタイユにとって、経験的な怒りは、散文の明瞭性に対して、あるいは明瞭性の中で与えられるのではない。むしろ経験が、人をコミュニケーションへと導くのだ。そのような語りかけの戦略は、言論の自由と論争の最も進歩的な理論の枠組みの内部ですら、聞いてもらうことを拒まれる。つまり理論は、バフチンのカーニヴァール性からハーバマスの公共圏に至るまで<sup>21</sup>、テキストの主張の中に対話的交換や透明なコミュニケーションを要求するような「下からの説明」を扱ったものだが、それらは、主権的発話の知的位置を占めることが不可能なこれらの特殊なテキストの周縁化を反復するだけである。このような諸理論は、このモダニ

ズムの一貫した徴候へのいかなる理解もたらさず、カウンターディスコースやカウンターヒストリーを捉えることができな

い。  
C・L・R・ジェームズの世代の反植民地闘争や文化批評の後継者であるポストコロニアル研究は、必然的に、植民地の歴史の一面面としてと同時に、革命的反植民地主義運動の本質的技術として、抵抗する発話を前景化した。特に先鋭的な政治的主体化に関する考察は、語りかけと聞かれる権利の問題をめぐる議論としてのポストコロニアルの書物の中に現れ、民衆と国家の主権性がいまだ問題となっている地域研究において出現する複雑な歴史によって枠付けされた多くの方法的形式をとる。ラテンアメリカ文学批評の重要なテキストにおいて、ロベルト・レタマールは、シェイクスピアのキャリバンの演劇的形象への訴えの歴史において表明された抵抗的発話の戦略を検証している。新世界の叛逆者であり、怪物的であるが詩的で、グロテスクな動物でありながら最も魅力的な台詞を与えられた存在であるキャリバンは、レタマールが指摘するように、ヨーロッパ人の想像力にとって、怪物的で嫌悪すべき人種の他者の統御可能なイメージを提供してきた。『テンベスト』のキャリバンは、不能な呪いに還元され、そこでは生きた反植民地的行為が、その主人によって、許可されていると同時に最も恐れられ



ていたのだが、イギリス帝国主義のカリブ海地域への最初の結びつきによってヨーロッパ人の想像力の中に呼び覚まされた社会的不安を表明しかつ包み込みながら、價いの幻想を提供した。レタマールにとって、現代の言葉によって侮蔑された食人種の歴史的創造は、ラテンアメリカの知識人の矛盾したアイデンティティと合流し、この形象の承認と自己弁護的否認を同時に生み出す。キャリバンの神話の歴史は、抵抗を、グロテスクなイメージと、野蛮に関する芽生えつつあった近代の言説の人種的論争に織り込む。そしてそれは容易に、本国における反民主的かつ前ファシズム的目的へと変容する。エルネスト・ルナンの『キャリバン・テンペストの統編』はそのことをよく示している。またそれは、メステイソの伝統とともに、文学と主体性と文明の理想として自らに課した植民地的模倣の形式を通じた自己において、キャリバンを超越しようとするネイティブの努力にも変容する。その英語訳を紹介したフレデリック・ジェイムソンによると、試論「キャリバン」では、他者性の弁証法の矛盾とジレンマを描き出すことが意図されており、そのための論争が展開される。

レタマールの解釈の鍵は、キューバのナシヨナリストに向けられたのだがすべてのラテンアメリカ人にも通じる植民地の侮蔑の言葉である「マンビ」という語の再利用にある。「これ

はキャリバンの弁証法である。われわれを侮辱する時、彼らはわれわれをマンビと呼び、黒人と呼ぶ。しかしわれわれは、われわれがマンビの子孫であり、叛逆者、逃亡者の子孫であると考える名譽を、栄光の印として再利用しよう<sup>22</sup>。」抵抗する発話の形式として侮蔑を再利用することによって、新たなキャリバンたちは、ある種の象徴的カニバリズムの中で、社会的に語る権利を持たないものの昇華を阻害し、その破壊的な力を専有する再意味化の作用に頼る。レタマールのアプローチは、キャリバンの形象においてヨーロッパ人がカリブ人の權威を失墜させたことへの同一化を通じた再利用の行為を支持し、そのことによって人種的棄却の歴史を引き受けることを提案したのだが、彼の印象的なマニフェストは、彼が文学的政治を、マルティのごとき闘士とサルミアントのごとき和解主義者やフェンテのごとき明らかな反革命家の間を闘いとして位置づける時、自らの弁証法的メカニズムの餌食となる。この「われわれの歴史的存在の根源にある」完全にして怪物的な反逆の態度は、いかなる差異も認めず、自己定義の手段としての対立関係を永続させることになる。

彼の試論は、反革命作家らの苦々しい批判に多くが過ぎ込まれ、その裏切り者のリストは長く、決して説得力がないわけではないが、ラテンアメリカの作家はどのようにすれば同様の罨

に陥らずに済むのかについての明確な意識を持たないまま、ためらうことなくキャリバンの呪いの言葉を語る。反抗的発話の言葉はレタマールのマニフェストに繰り返し現れ、われわれのために否定的な言葉で、帝国主義の権力に対抗する人民の意識を覚醒させる主権的に語る英雄の肖像を描こうとした。しかしこのような認定された論争は、そのような反応をいかにしてもたらずのか知りたがる読者には、ほとんどなにも提供しない。実際それは、文学は物質的状况という現実を反映し、表現することによってその人民に奉仕するべきだという大きな主張を超えたところでは、何ももたらさないのだ。残りのものはすべて、反革命的な無価値なもので、それらはブルジョアの感性や失敗した社会的リアリズムに迎合する頹廢なのだ。そして、われわれが判断と不満の揺れる波を認めたとしても、この種の挑戦的口答えは、棄却の象徴的な作用を暴力的にあらわにするにもかかわらず、公共圏における差異を排除してしまふ。一方、論争は、他者を相手にすることで満足する。

われわれは、抵抗へのアプローチとしてのキャリバンの口答えの限界が、一九四八年のフランス語圏の詩の先駆的アンソロジーへの序文として書かれたサルトルの「黒いオルフェ」の中に繰り返されるのを見ることができる<sup>23)</sup>。サルトルは、キャリバンの呪いの言葉におけるアフリカ、マダガスカルおよびカリ

ブ海の詩人の声を言い表すことの衝動を抑えることができない。彼は言う、「それらの黒い口を塞いでいた嚮を取った時、あなたがたは何を期待していたというのだ<sup>24)</sup>。」急進的な文学の発話行為を特徴付ける上でレタマールとサルトルの限界となっていたことのひとつは、彼らがともに、文学的な語りかけが、同一化と表現の道筋を通してしかなされないと認めてしまったという点にある。同一化を引き受けず、「現実的、物質的」関係性だけを表現しようとする代わりに象徴的な関係性の表現を求めるような文学的大演説は、レタマールの「キャリバン」によれば、文学的に固有のものにはなり得ず、作品を粗野な形式主義やデカダンスの束縛へと開いてしまうことになる。サルトルにとって、「ニグロの詩」の目的は、植民地権力たる「あなた」に他者の経験への窓を与えながら<sup>25)</sup>、アフリカのリズムと歴史的トラウマと本質的人間性を表すためのものであったが、それは、彼が、明らかに専ら白人の読者に向けて、一連の黒人詩を紹介しているように見えるという奇妙な結果を伴う。対照的にファノンが『黒い肌、白い仮面』でこの部分に応答した箇所では、より繊細な革命的展望が議論されている。ファノンは言う、「もし私が叫んでも、それは黒人の叫びではなくなる<sup>26)</sup>。」ファノンは、歴史的発展の弁証法的構造が彼に割り当てるような場所を否定する。サルトルであれば、ファノンをそこに閉じ込め

たであろうような場所をだ。皮肉なことに、レタマールとサルトルはファノンを読んでいた。しかしファノンの語りかけの政治の複雑さは、反抗的発話の性質についての彼らの思索や、その方向性や、その限界や、それが追求した権力との根源的結びつきに、いかなる情報もたらさなかった<sup>70)</sup>。

ジェームズは一九五二年十一月に『船員たち』の序文に署名した。それは『黒い皮膚、白い仮面』の出版と同じ年である。

これらのテクストはともに、レタマールとサルトルが想像し得なかった社会現実の力強い読みを提供してくれる。サルトルにとって、黒人が書くということは、革命的文学の舞台上に新しい声が出現したことを意味していたのに対して、ジェームズとファノンが共有した苦境は、彼らの発話を、排除された登録の場所へとしむけるのだが、そこから彼らは、形式の革新とそれによる判読不能性という危険を冒しながら、語る主体を实体化しなければならぬ。自らの立場の上に立ち、自らの名前において語るためには、ファノンはまず、彼が打破しようとした公共言説が彼の上に投影するあまたの人種的幻想を操作しなければならぬ。『黒い皮膚、白い仮面』は「話すということは、他者にとって完全に存在しているということだ」という主張から始まる。このことは、「アンティエユのニグロは誰であれ、常に言葉の問題に向き合わなければならないからだ(BSWM、

17-18)」という事実と対照させられている。ファノンは彼の罵りの中で、排除された他者の立場と格闘する。なぜなら彼は、公共圏の中で、あるいは公共圏によって彼に割り当てられた役割を拒絶しなければならないからだ。人種主義的主体性からの脱疎化の探求と「永遠にあからさまな抵抗と対立と挑戦の中に埋没することへの」拒絶は、彼が、自分のために「断絶と衝突と闘争の他性」を用意してくれるような言論の自由の伝統からのアウトサイダーであることを暴露する。ファノンは、歴史への弁証法的昇華への準備ができているアンチテーゼの役割を拒絶し、人種意識への従属という限界と、彼の身体と文化と人民と言語に結びついた彼自身の特殊性の抽象化の双方を否定する<sup>71)</sup>。『黒い皮膚、白い仮面』は、しばしば最も敏感な批評家によって言われるような、人間主義的普遍性のアヴァンギャルドなマニフェストではない。そうではなく、アブデルケビル・ハティビが「脱植民地化の労働」と呼んだような、必然的に罵りの形式を取るものなのだ。なぜならそれは、公共圏の信仰からではなく、近代性の徴候の中で語らなければならないのだが、この脱植民地化の労働こそが、誕生と労苦のあらゆる結合とともに、この徴候の克服を可能にするからだ。

ジャンルとしてのマニフェストの明らかな性質は、それが「あなた」に対しての発話であることを前提とする点にある。



そのような前衛主義は、レタマールの、仲間の作家に対する酷評によく示されており、それはマニフェストの語りかける対象に割り当てられた真実との戦略的関係性を反映している。自明の真実というものがその常套手段なのであり、その不平は読者の賛同を誘ってはいけないのだ。そのような真実は、それに固有の宿命を隠蔽し、マニフェストの議論をすべての読者と隔てる境界線の向こう側に置くことになる。しかしながらジェームズとファノンのテクストは、公共圏における異論の枠組み自体に異論を唱える発話を持つような排除された声の矛盾に対して、的確に語るのだ。この遠回しの語りかけは、その形式が前もって与えられていないという単純な理由によって、その発話を内包することはできない。それはそのジャンルと限界を、その書く行為の内容のうちに再創造しなければならぬ。その結果、罵りの形成の正確さには、逆説的に、孤児がものを書く時の棄却の感情が入り交じる。罵りはジャンルではない。むしろそれは、急進的な主張の規範をも含む社会的規範の内側からやってきて、時に判読不能な欲望について語る、愚かな狂人のように爆発する罵りなのだ。逆説の徴候の下に書かれた『黒い皮膚、白い仮面』は、その無秩序で常に首尾一貫性を欠いた自己認識が、その議論やその目的の行為遂行の例証の魅力的な裏付けになるにもかかわらず、包括的帰属に抵抗する。

それにもかかわらず、マニフェストは罵りに近いジャンルであり、おそらく罵りの如きものを生み出しやすいジャンルであり続けている。モダニズムのジャンルとしてのマニフェストを説明するための最もよく考慮され詳細な試みにおいて、ジャネット・ライオンの『マニフェスト—近代の挑発』は、「マニフェストは近代性を構成する言説」であり、民衆の議論と普遍的自由の不平等で不公平な配分への的を射た不満を表明していると主張している。ライオンにとって、マニフェストは近代性の中心となる。なぜならそれは、伝達可能な形式のうちにカウンター・ディスプレイの語る立場を体現し、広く一般に判読可能な様式のうちに急進的抵抗の物語を発信するからだ。「マニフェストの革命的な語る立場は、論争的な土壌を補強するばかりなく、歴史の言語とプロットの条件の制御をも引き受けることによって、政治的な確実性を構築している(80)」。恒久的な革命を告げる響き渡る言葉によって、マニフェストは政治的無意識を物語に転化し、革命的物語の安定した状態を表現する。それは、地域的でナショナルな文化を超えて世界的舞台へと展開する革命の広がりのための「信頼のおける議論の形式」を提供するが故に、一般的帰属によって補強され、革命的精神を支配するものとして紹介された、政治的な語りとなる(MPM, 24)。明白な抗議の地球規模で広がる射程は、このジャンルの本質的



な特質である。というのも、根本的な手法は正義と真実の主張の普遍性を要求するからであり、ライオンはそれを、局地的な争いを超えた「確実性<sup>②</sup>」と表現する。明らかに存在する誤りに対して、マニフェストは、明白な正義が正しきものと真実なものの普遍的物語へと挿入されるべきであると要求する。ハーバマスの公共圏と言論の自由を援用すれば、この抗議の発話の動機が、反抗的発話を一般的に状況付け、普遍的な自由状態への要求が誇張され不公平に適用されているという理解の下に語ることを可能にしている。

ハーバマスが主張するように、「『公共圏』を、共有され、公的で論弁的な空間を意味するものであり、その内部で市民は共通の関心事について議論するためにその社会経済的差異を括弧に入れるような場所を意味するのだと捉えるならば<sup>(2)</sup>」、「ポストコロナル研究、セクシュアリティ研究および人種研究によってもたらされた展望は、公的言説のコミュニケーション・モデルの限界を示すことになる。そのような公的言説による公共性の概念は、その理想的イメージとして、言論の自由を保証し、全ての者に開かれており、以下のような複合的ないくつかの必要条件が優先的に成立するという状況を通じて実現する、ブルジョア社会を参照することになる。すなわちここでは「単なる個人的利害は許容されてはならず、身分の不平等は括弧に

入れられなくてはならず、討論するものは同等の立場で討論しなければならぬ。そのような議論は、公共の利益に関する共通理解という強力な感覚の中に現れる『世論』に帰結するだろう<sup>(3)</sup>。」マニフェストと同様に、罵りも所与のものに異議を唱える。しかし、排除された主体性の発話としてそれは、抽象的な公共の利益を目標にすることはできない。なぜならそれは、「単なる」個人的なものを公共空間に投げ入れるからだ。『船員たち』で示されているように、特殊性と特別嘆願は、語り手を待ち、語り手を駆り立て、反論を認可するようなポピュリストの前線の存在しない場所で語ろうとする企ての、必然的な属性なのだ。罵る者は主体として語る。彼は、彼が語りかける対象である多くの他者と、発話する他者への、状況の定義への、彼の愛着を持つものへの深い隷属化を共有し、こうして、自らの棄却を確認することによって、そのような主権の語りの幻想を呼び出すことになる。

女性とマイノリティを公共言説から除外された参加者とみなしたハーバマスの失敗に批判的ではあるが、ライオンは、ハーバマスの公共圏とカウンターディスコースと理性の普遍的主体の概念を、所与のものとして受け入れてるように見える。彼は、公的交換は「内在的基準と統制的規範としての普遍性を創出する」と述べている。このように公的交換は、排除によって

枠付けられていようと、公共圏の完全性と普遍性に対して周縁化された他者への拡張を可能にするのだ。ハーバマスにとって交換は、規範の側面として、批評の内在的可能性を確立する。そしてそこから「近代性それ自体に固有のカウンターディスコース<sup>⑩</sup>」が構成されることになる。「近代の無意識的表明としてのカント哲学に始まり、啓蒙主義の自らの偏狭さを啓蒙する」という目標を掲げた(MPM, 33)「近代性のカウンターディスコースは、自由の実践のために清算された空間において支配的なものに出会う。カウンターディスコースは啓蒙主義に続いて、ディスコースとそれに出会うために現れた存在が一体となるようなやり方で啓蒙主義を増幅させる。

「反対意見が完全性の目的論における弁証法的対置と捉えられる一方で、「口答え」の既成のモデルを提供するマニフェストは、公共の舞台における政治的主張の特権的な場所と形式として現れる。その結果、反対意見は常に、規範や中央へと方向付けられ、政治的挑戦を通じて、広範な真の普遍性へと差し戻されることを目指す。ライオンは、美学的アヴァンギャルドの構築へと向かう政治的アヴァンギャルドの運命を読み解き、美学的の反逆は脱政治化され自立的な芸術のブルジョアの制度を標的にしているというペーター・ビュルガーのアヴァンギャルド理解に従いながら、アヴァンギャルドのマニフェストとは、「平

民の公共圏の言説<sup>⑪</sup>」に依存しながら同時に大衆文化を呪う立場でもあると主張する。近代性の批判として、アヴァンギャルドは、反転しているが損なわれていない公共圏の価値を再現する。マニフェストの普遍的形式は、ライオンの研究と文学的歴史のために確立された公共圏の理論化の枠組みの中で、既成の形式によって、反対意見の実践が確実である限りにおいて、反対意見の連続性を可能にする。こうしてこの議論は、社会政治的形式主義をマニフェストを構成する語りかけの構造の中に位置づける。伝統の形式的な記述を提供することでマニフェストを限定しないようにするというライオンの公言された欲求にもかかわらず、彼女の研究の中では、マニフェストの形式とそれに付随する語りかけの構造は、歴史的に不変の反対意見の伝統を作り出している。さらに我々は、刺激的で挑戦的な発話がしばしば政治的な理解や行動の代役を果たすような政治的無意識の中で議論することもできるかもしれない。これはつまり、ライオンが民主的表現の同義反復に陥っているということだ。その循環性と象徴的沈殿性は、見せ物として発信されるという怪物的精神を作り出す。というのも、電波の個人主義は、ウィングダム・ルイスが考えたように、商品化可能だからだ。しかしながら、抵抗する発話における語りかけの様式を取り込みながら、ライオンは、(フェミニズムや人種の差異の意識によって)見

民の公共圏の言説<sup>⑪</sup>」に依存しながら同時に大衆文化を呪う立場でもあると主張する。近代性の批判として、アヴァンギャルドは、反転しているが損なわれていない公共圏の価値を再現する。マニフェストの普遍的形式は、ライオンの研究と文学的歴史のために確立された公共圏の理論化の枠組みの中で、既成の形式によって、反対意見の実践が確実である限りにおいて、反対意見の連続性を可能にする。こうしてこの議論は、社会政治的形式主義をマニフェストを構成する語りかけの構造の中に位置づける。伝統の形式的な記述を提供することでマニフェストを限定しないようにするというライオンの公言された欲求にもかかわらず、彼女の研究の中では、マニフェストの形式とそれに付随する語りかけの構造は、歴史的に不変の反対意見の伝統を作り出している。さらに我々は、刺激的で挑戦的な発話がしばしば政治的な理解や行動の代役を果たすような政治的無意識の中で議論することもできるかもしれない。これはつまり、ライオンが民主的表現の同義反復に陥っているということだ。その循環性と象徴的沈殿性は、見せ物として発信されるという怪物的精神を作り出す。というのも、電波の個人主義は、ウィングダム・ルイスが考えたように、商品化可能だからだ。しかしながら、抵抗する発話における語りかけの様式を取り込みながら、ライオンは、(フェミニズムや人種の差異の意識によって)見

直された、ハーバマスのカウンターディスコースへのアプローチの限界のひとつを明らかにする<sup>33)</sup>。

マニフェストに固有の語りかけの難問を迂回するというこの傾向は、ライオンが、その感情的側面を説明しようとする時に、特に顕著である。確かに如才なく、マニフェストの感情的主張をその最も基本的で不可避な性質として見ながら、ライオンの議論では、怒り、欲求不満、憤慨、苦悩についても言及されているが、それは主に修辭的道具として言及されているのであり、感情的な力が分析の対象になることはほとんどない。例えば、「マニフェストはまた、情熱的で公正な怒りの言説の使用を通じて、確実性や不可避性や（アーレントの用語を思い起こさせる）『抵抗不能性』を主張する（MPM, 61）。」グレマスの感情的状態の分類法を持ち出すことは、マニフェストに共通した感情的側面である怒りを、説明的形式主義に内包し登録するのに役立つ。説明的形式主義は、語りの立場と心的状態が安定した場所である修辭的叙述に有利になるように、感情を副次的な存在にするために感情を捉えるのだ。すなわち、怒りとは、語りかけの安定した道具であり、その魅力とその形式の判読可能性を通じて、読者の意見の一致を可能にするのだ。このことが最も明らかなのは、マニフェストの読者は、このジャンルの感覚的で感情的な訴えを通じて現れるのだと主張する時だ。彼

女は言う。「マニフェストは、感情的で実験的な判読不能性における努力を通じて読者を作り出す急進主義的テキストである。すなわち、マニフェストが、未来の読者の抑圧の経験と抑圧への対応を定式化し、実践する時、読者は具体化する（98）。」判読不能性のテーマは、感情の概念へも結びつけられている。

〔……〕もしマニフェストが、ヘゲモニーへの比喩的な暴力的否認のための論拠を提供しようとしているのだとすると、それは、支配的なイデオロギーに対して自らを判読不能なものにしなければならぬ。〔……〕参加と政治的周縁化の葛藤、怒りと自制の葛藤、脅迫と議論の葛藤、神話的時間と緊急の計画の葛藤という、マニフェストの形式がもつ逆説は、容易に、マニフェストの形式を使用する主体の上に投影される。普遍主義的規範性の魚眼レンズによって誇張されて、そのような葛藤は、民主的理想を脅かす固有の非合理性の徴候として読まれるかもしれない（MPM, 61）。

判読不能性にせよ無意味性にせよ、マニフェストの主張の感情は、抗議の主体が、それが対処しようとしているものに汚染されないうために避けられる危険性がある。このことは、マニフェストとその政治的状況の正確な説明になるかもしれない。しかし汚

染の論理、すなわち判読可能性の限界は、抵抗の発話を、それが論破するべき規範自体の中に登録してしまうのだ。ここにおいて、罵りの参入と排除の力学が作用し始める。というのも、ライオンの言うように、抗議の語りは、主体を消滅と公的交換の圏域からの突然の追放という脅威へと開いているからだ。そのような危険の中であって、罵りはデスコースの中へと立ち入ってゆくのだが、その言語を用いながら外国人としての目的のために語ることによってそこに危機をもたらす。

判読不能性は、主観的かつ感情的な状態の説明と、それがどのようにに社会契約の中に編み込まれまたそこからほつれてゆくのかの説明の両方を要求する。マニフェストが、意味の側に社会的に与えられ確かに存在する実定性とともにあるとすると、罵りは、それが「発話不能なもの」を持ち出したまさにその瞬間に、判読不能性と無意味へと落ちてゆく。「(なぜなら)言語は、それを発話可能性の境界まで導くような暴力を保持しているからだ」<sup>(9)</sup>。このような理由で、私が「排除された登録」と呼ぶ問題を捉える既成のジャンルは存在しないのだ。いかなる「信頼に足る言説的形式」の利用可能性の歴史も、失敗したマニフェストや罵りの如き不平のような論争のアーカイヴの中では解き明かされない。むしろ罵りの語りかけの、ハーバマスのカウンターデスコースの分析においては啓蒙思想の賢明で

率直な物言いの強化とされた批判的態度は、根本的な排除の余波や残余として、それ自体を反復する。『ポストコロナル理性批判』の最初の件においてガヤトリ・スピヴァクは、彼女がカントの自然人の相貌を読む時に見る根本的な排除をわれわれに紹介し、カントによってティエラ・デル・フエゴの先住民と特定された原始人が哲学の舞台へと連れ出され、即座に人類の進歩と文明と啓蒙のアンチテーゼとして否定されるという困惑的な方法へと、われわれの注意を向ける。この根本的な排除は野蠻人を立ち退かせるのだが、カント哲学、すなわち啓蒙主義以降解消することのできない性質としての立ち退かせの行為を確立する。そして、この西洋的理性の他者を即座に排除すために作られた一体性の確立を通じて、排除の行為は、数十年に渡って繰り返される認可され神聖化された制度となる。しかし、次第にこの関係性の徴候を名付けることは不可能となる。なぜならそれは、北と南、東と西の関係性を確立する身振りだからだ。原始人が、ネイティブ・インフォーマントになり、ポストコロナル批評家となる。「歴史的な語りが植民地からポスト植民地、世界性へと移行するにつれて、ネイティブ・インフォーマントは、フロイトの排除 *Verweigerung* という比喻概念を用いるなら、匿名としての言説的世界へと投げ出されることになる。この匿名性はわれわれの内にも存在しているので、われわれ

れは自分の固有名の信憑性を要求することができないのだ (GPR 111)。「潜在するものは、公共圏の開かれた交換における秘密を放棄しない。しかし、ポストコロニアルな発話は、理性と啓蒙と包含の枠組みにおける根本的な排除の再生産を指摘することで、公共圏の危機を作り出すことができる。そうすることによって、そのような発話は歴史の弁証法的モデルの虚偽を証明し、そのことがポストコロニアルな声に、全体性へと超越し一体化されるアンチテーゼとしての役割を与えることになる。

先には、罵りは、近代的国家とその文化の規範的構造における主権の、不在と普及を同時に表す近代性を具体化すると主張した。不在（主権者が主権を有していない）と普及（マッカラン法は主権を有する市民によって廃止される）は、隷属化と主体化の矛盾を倍増し、そのために、後者の機会は前者の値段で買われるのだ。しかし、いかなる対価よりも痛切に、新たな主体化の自由はそれ自体、隷属化の結節の内部から呼び出される。近代性に先行する権力の形式は近代の規律と規則の中に内在しているということを示すために、フーコーは『精神医学の権力』と題された講義を、主権のおよび規律的な権力の混在するふたつの意味とともに始めている。「精神医学の創始的意味」に言及しながら、一九七三年十一月十四日の講義は、ピセート

ルの悪名高き牢獄の「狂った」囚人を解放するピネルの絵で始まる。自由になった囚人は、最終的には治療への途上に置かれる。この精神医学の力の開始と解放の契機とは対照的に、フーコーは、ピネルがジョージ三世の狂気について、一八〇〇年の『医学哲学論』（共和国暦九年）の中で報告したケースを紹介している。王の医師の語りをもとにして、ピネルは絶対的な棄却の瞬間にある主権者の姿を叙述する。理性を奪われ、クッションの貼られた部屋に幽閉され、そこでは医者の方で、召使いが彼に彼はもはや主権者ではなく召使いの命令に従わなければならないのだということを静かに教え込んでいたのだが、そのような状況下で君主は、医療の一部として、より大きな物理的権力に従うことを強要されたのだ。予想されたことだが、患者はある日、糞便とゴミの雨とともに彼の医者を迎え入れた。その結果、拘束され、衣服を脱がされ、身体を洗われ、幽閉された主権を持たない王は、農民の抗議にまで屈従しながら更に何ヶ月も同様の治療に堪え、ついには従順で言いなりになると、治療が完了したことを宣言されるのだ。ピネルが表現したように、狂人たちが主権的な理性と人権によってその鎖から解放されるほとんど神話的な絵が、今でも、主権的権力の隠喩を通じて記号論的にも制度的にも実行力を持っている一方で、ジョージ三世の治療の説明は、権力と主権の力を幽閉と棄却の舞台の

内部で、従属的な王の世話をする従者と医師という治療の行為者の中に霧散させる。この対照性によってフーコーは、リア王と違ってジョージ三世は、「主権者の権力とは異なった、全く別のタイプの権力」の下に連れて来られたのだと主張することができた。「それは異なった人々の間に分配されている匿名的で、名前を持たず、顔のない権力なのだ。」

規律的権力の侵犯という観点から考えると、社会的秩序の中の主権性の不在と普及は、書くことによる語りかけも変更させる。「すなわち、規律的権力と間違ひなくその根本的性質が従属的身体を作り上げるのだ。それはまさしく身体に主体機能を据え付ける。(……) 規律的権力は個別化する。というのもそれは、書くという監視システムによって主体機能を身体的特殊性に固定するからである。」精神病院における精神医学の権力の発展へと結び付けられながらも、書くということはまた、その権力への抵抗の場所にもなった。科学的書物が周縁の主体の発作を記録しているように、それは無意識のうちに、主体機能をまさに規律的権力の中心に書き込んだ。そして主体を身体の中に書き込むことで、逆説的にも、規律は、その身体的主体を、正に身体的な主体に向けられた権力のために従属的である表現システムの中に登録したのだ。フーコーの近代的隷属化の歴史に描かれた図式は、棄却された主体の身体の周囲にあるい

はその中を永遠に回っている悪しき円環ではない。むしろ、彼が「侵犯への序言」で説明しているように、境界と侵犯は、弁証法的な膠着状態や歴史的進歩というよりはむしろ、螺旋状の影響関係を表している。近代的権力と抵抗は、同じ言説空間に存在し、それがなければ近代的従属は主権的権力を失脚させることができなかったであろう書物という同じ媒介を通じて、その効果を生み出す。精神病院の例において、精神医学の権力は、ヒステリーの徴候の集約的な目録からその権威を引き出す。こうして、精神分析的「真実」の科学が、狂った女性たちの神秘的な抵抗と謎めいた振る舞いから生まれ、このことが次には、時間と空間と経済の構造的市民的革新を要求したのだ。

法が、それを通じて人が主体と認識されるような判読可能性の規範を作る一方で、この認識は次に、主体が法を取り込み、それを自らのものにし、法を真実の形式として認識したことを意味することになる。「法とは、それによって主体が十全に認識されるような主体性の基準を確立するものである。」その身体的特殊性に固定された主体は、判読可能な法に対抗する隷属化の真実を利用できる。かくして、近代的な主体化は、オスカ・ワイルドが「生の新たな理想」と言ったように、芸術の目的となり、真実が主体を法の限界と判読可能性の境界へと導く時、まさに真実との関係性において、主体を危険に晒す。同

時に近代性は、書く行為を通じて規律付けられた主体―身体の到来を告げるものであるために、身体も危険に晒す。マニフェストの主権的主体とは違い、罵る者は、彼に割り当てられた判読不能性を引き受け、それをディスコースの中に織り込むとき、自らを危険に晒すことになる。社会的棄却の境界を新たな主体性の関係へと書き換える近代的な主体は、言論の自由の古典的意味<sup>38</sup>における自由な語り手同様、抵抗の瞬間に自己を失う危険性を持っている。「規範に異議を呈し、新たな規範を要求することは、自己を自己から引き離すことである。〔……〕抵抗と対立の瞬間は、自分が自分を束縛しているものに結びつけられているとわれわれが気づいた正にその時に現れるのだ<sup>39</sup>。」

ラカン<sup>40</sup>は先行する法と秩序の象徴的登録の効果としての法の後に主体を位置づけるのだが<sup>40</sup>、罵る者は、彼らに従わせる親密さのもつれあう関係の網の目を実体化するために、法の前に行為し、法に語りかける。国家の主権性や資本主義の支配階級は罵りの対象にはなるが、罵りとは、それらに弁証法的に対立する実践やジャンルではない。それは近代的な隷属化の徴候であり、そのようなものとしてそれは、自らの語る立場の周縁性への個人的主体を開く。法に語りかけることの幻想は、強烈な外部性の再中心化を可能にし、そのことは、権力への関与か否認の目的に貢献する。マニフェストの要求と違い、罵りは、主体

を、苦痛を伴う変形を約束し自らを棄却の訴えとしてのみ表明する先例のない発話へと開く。

いかなる発話者も、突然このような経験や知覚の中に投げ込まれる可能性をもっている。というのも、いかなる主体も、真実がもはや、暴君を告発する哲学者の怖れのない発話でなくなった時に、「真実」の出現に対して防御することができないからだ<sup>41</sup>。フーコーは、彼の最後の講義で、主体はどのようにして真実の生産の媒体となったのかを問い続けているように、自由な語りから現代の生政治の主体性の生産へといたる系譜を描く。技術的合理性と社会的判読可能性への話者の隷属化の拡大は、限界によって境界化されたというよりはむしろ、限界で飽和している展望図を確認する。というのも、不平をもたらしたり自由な発言に加わろうとする話者は、彼自身が判読不能な存在になるかもしれないという危険に常につきまとわれているからだ。境界を持ち、逸脱や犯罪や棄却や真の無意味へと陥る危険性によって封印された規範の知は、モダニズムの文化生産において普及しているが、それは、制限がその上に折り重なり正に権力の主体性の中心で増殖するようなやり方の文学的発明による挑戦を受けている。われわれがジェームズの後書きで見てきたように、罵りの語りかけとは、今なお拡大している排除された登録と過剰な制限の場所と関係するものなのだ。

- (1) Michel Foucault, *Fearless Speech*, ed. Joseph Pearson, Semiotext, 2001, 170-71.
- (2) 「深々せよ、カント的批判を理性の主権的実践の中ではなく後見人から自由な意見を独立して形成する責任の中にも行うとする。ローの試みである。『批判とは何か』参照」 in *The Politics of Truth*, ed. Sylvère Lotringer and Lysa Hochroth, Semiotext, 1997.
- (3) Michel Foucault, "The Subject of Power" in *Power: Essential Works of Foucault, 1954-1984, Volume III*, ed. Robert Hurley, James D. Faubion and Paul Rabinow, The New Press, 2001, 326.
- (4) ローは三種類の闘争を示しているが、それらはいずれも権力に内在するものである。①(民族的、社会的、宗教的)支配に対する闘争、②個人をその人が作ったものから引き離す搾取の諸形態に対する闘争、③個人を自己自身に縛り付け、そのすることによって彼を他者に従属させるような形態に対する闘争(隷属化に対する闘争、主体性と服従の諸形態に対する闘争)。(Ibid., 331.)
- (5) Foucault, "Preface to 'Transgression,'" in *Language Counter-Memory, Practice*, Cornell University Press, 1980.
- (6) Theodor Adorno, *Minima Moralia: Reflections on Damaged Life*, Verso, 1987, 151.
- (7) *Mariners, Renegades and Castaways: The Story of Herman Melville and the World We Live In*, C. L. R. James, Intro. Donald Pease, Dartmouth College: The University Press of New England, 2001, xxvii. 十分な歴史的文献に加え、ユースの序論と、その後の *Ari-zona Quarterly* における試論は、帝国主義とアマリカ半島の無期限拘留におけるアメリカの批判的視点、MRCの論証となる。シエームスの受容の有用な解説として、Grant Farad の *Rethinking CLR James* を参照。
- (8) MRC, 123.
- (9) MRC, 126.
- (10) Jean Genet, *Declared Enemy*, 51.
- (11) MRC, 166.
- (12) マッカーシー時代に成立したマッカーラン法は、移民の人種の障害をとり去ったが、国家の移民政策における民族的な割り当てと新たな好ましくない範疇を作り出した。この法は、移民帰化局に、民族文化や性別による適応性や政治思想を含む多くの点での差別的裁量を許容し、その裁量のために、移民帰化局は「反共産主義のための道具となった。この法によって認定されたイデオロギーの関与は、二〇〇三年に移民帰化局がより広範な安全保障と排除と本国引き渡しの権限を持つ移民税関捜査局に変わる時まで、そのままの形で存続した。
- (13) ビースは、ウィリアム・E・ケインとポール・パールとチャモシー・ブレナンを「航海者たち」をシエームズの作品の中で周辺のな作品であると認めた研究者としてあげる。この批評史の中で特筆するべきは、パールによる「シエームズのアメリカの人民への主張はアメリカ的資本主義への謝罪から構成されている」という見解である。ビースを参照。
- (14) Felman, 2003.
- (15) シエームスの階級と人種の折衝はそれ自身複合的でヒエラルキを含んだものである。一九三六年の『ブラック・ジャコバン』のテクストは、階級に対する人種の優先に反対する議論を示し、「一七九一年のサン・ドマンゴの奴隷蜂起をヨーロッパ史の中心的事件を位置づけるが、一方で、『航海者たち』は、民族国家を、ナチのイデオロギーの神格化に至る人種のドクトリンと同一視している。たえず、イデオロギー的なアライヤや階級闘争の目隠しとしての人種と、階級の差異を硬直化させる差異の範疇としての人種の両方を扱いはながら、『航海者たち』は外国人の問題を取り上げる。
- (16) Walter Benjamin, "Some Morris in Baudelaire," in *Charles Baudelaire: A Lyric Poet in the Era of High Capitalism*, trans. Harry Zohn, Verso, 1989.

- (17) Jean Genet, *Declared Enemy*, 51-52.  
 (18) Roberto Fernández Retamar, *Caitan and Other Essays*, trans. Edward Baker, for: Fredric Jameson, University of Minnesota Press, 1989. Cesaire *Une Tempête: Adaptation de "La Tempête" de Shakespeare pour un théâtre nègre*, Paris 1969. Edward Brathwaite, *Islands, 1969*.  
 (19) Georges Bataille, *Le Bien du ciel*, Gallimard, 1979. II. ユタインの激昂の使用は「シエロ・クリステヴァがセリヌスの反記号論的読解において追求した「パラノイアの激昂」とは区別しなければならぬ」。古風な英語の使用法と同様にフランス語の使用法では、「激昂」は「怒りばかりでなく、狂大病の発作も示す。典型的なアンビバレンスとともに「ユタインは、人と動物、理性と狂気」をしてもより身体と感情の間の差異を混乱させる語を使う。ユタインの激昂は、棄却の契機であり、与えられた言葉の制限された経済を言語と自己の自堕落な浪費の一般的経済へと開く犠牲性である。フアンストの同胞の批判と同調しながら、ユタインの啓発的激昂は「自らをその破壊の暴力にさらし」その試験が外部に移動させられたり、「女性的であり男性的であり、衰れであり全能であるユタイン、有害なヘーミエントの相絶つるうちに具体化し」(Kristeva, *Powers of Horror*, 318)、「投影せられるユタインを決して許さぬ」。フアンスト批判の「ユタイン」以下の作品を参照。"The Psychological

- Structure of Fascism" and "Popular Front in the Streets" in Georges Bataille, *Visions of Eress: Selected Writings 1927-1939*, ed. Allan Stoekl, University of Minnesota Press 1985.  
 (20) ユタインの晩年の未完の三部作は「犠牲と主権性の氷統的かつ歴史的な昇華の分析から、主体性と書くことへの行為の可能性」の中での同様のテーマの探求にわたる彼の思想の進展を反映している。  
 (21) 十七世紀の一般向けの抗議文からのマニフェストの素暗らしい研究の中で「ジャンネット・ライオンは、反抗的発話のジャンルとしてのマニフェストを分析する「フアンスタ」を援用している。"Manifestoes: Provocations of the Modern, Janet Lyon, Cornell U. P. 1999.  
 (22) Roberto Fernández Retamar, *Caitan and Other Essays*, trans. Edward Baker, for: Fredric Jameson, University of Minnesota Press, 1989.  
 (23) *Anthologie de la poésie nègre et malgache de langue française: précede de Ophélie Noir par Jean-Paul Sartre*, L. Sédar-Senghor, Presses Universitaires de France, 1948.  
 (24) Cited in Frantz Fanon, *Black Skin, White Mask*, 29.  
 (25) Cf. Robert Young, *White Mythologies, especially the chapter on Sartre and dialectics*.  
 (26) Frantz Fanon, *Black Skin, White Mask*, 29.  
 (27) ユタインは「「ギャリマン」の「フアンスタ」

- に言及するが、それは棄却の象徴の再備給の戦略における自己疎外要求のフアンの展開にとどめただけに思われる。革命的主体性を開くために要求された脱疎外の議論はなされた。同時期サルトルは『地に呪われた者』への序文において、「「第三世界は自らを見いだし、自らの声を通して自らに語りかける」と書いている。彼はフアンソンのテキストだけでなく、一九六一年の新植民地的出来事によっても象徴されている反植民地的方向性を理解している。フアンソンの「黒いオルフエ」の批判にもかかわらず、サルトルは『地に呪われた者』の中で、白人ヨーロッパ人に向けて語りかけ続ける。  
 (28) フアンソンの最も理性的な読みは以下の「またつで」(Homi Bhabha, *The Location of Culture and Imperialism*, Vintage, 1994.  
 (29) 「フアンスタの革命的発話の位置は「論争的な場を強化するだけでなく歴史の言語とフロットの条件を制御することによって政治的確実性を作り出す」(MPM60)」。これが「スマールのレトリカルな策略であり、歴史の使用である。モダニズムのテキストでは「テキストのマイオリティ」、自らの名前と自らの声による発話行為を伴う一般された不安定性」(Young) 確実性は失われつつある。  
 (30) Nancy Fraser, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy," *Social Text*



25/26 (1990). Cited in Lyon, 55.

(31) Jurgen Habermas, "Theory of Communicative Action", 302.

(32) Lyon, 82.

(33) ハーバマスの公共圏の後退とカウンターディスコースの増加の説明は、あまり病理の診断にはならない。モダニズムの一致した語りは、近代の特殊性への参加の拒否の中で、近代性に特徴的な隷属化と主体性の変更を捉えそこなう。彼の「近代性」は人を戸惑わせるかもしれないが、ハーバマスは、罵る者でもなければ、彼の公的な語りの中に近代を形作る暴力的歴史を盛り込むこともできない。一方ルイスとアドルノは、公共性の中に人種的身体的想像力を刻印する公共生活の精神的性的要

素を見いだす。セゼールの作品は、怪物的な社会関係の探求のための演劇を提供し、一方フannonの棄却と人種的文化の精神的性的投影を読み取る能力は、近代の行き詰まりを超えた政治的可能性の構想を可能にする。世界化は自己の物語の吊鐘であるというジェームソンの結論とは異なり、政治的主体性のアンチ/ポストコロニアルな理解は、本国の物語の本質的排除を明らかにする。公共圏の物語の読みへと戻った時、アンチ/ポストコロニアルな差異は、われわれの、明らかな衰退の空間における自由の実践としての世界理解を可能にする。

(34) Judith Butler, *Antigone's Claim: Kinship Between Life and Death*, Columbia Univer-

sity Press, 2000, 80.

(35) Foucault, *Psychiatric Power: Lectures at the Collège de France, 1973-74*, Palgrave Macmillan, 2006, 21.

(36) *Psychiatric Power*, 53.

(37) Butler, "Bodies and Power Revisited", 191.

(38) Foucault, *The Hermeneutics of the Subject: Lectures at the Collège de France, 1981-1982*, Palgrave Macmillan, 2006.

(39) Butler, "Bodies and Power Revisited", 191.

(40) "chargé de représenter ce point où la loi n'est pas comprise du sujet, mais jouée par lui." *Séminaire II*, 158.

(41) *Fearless Speech*, 18.

